

研 究 主 題

勢いのある中部の体育 ～ はずむ心 豊かな学び 確かな力 ～

1 研究の仮説

- ◇ 友だち・教師・学習の場やルール・教具などとの関わり合いと学び合いを重視した学習を展開していけば、いろいろな動きや技能・知識を身に付け、体力の向上を目指すとともに、自ら学び、自ら考え解決する力を身に付けた子どもを育成することができるであろう。
- ◇ 子どもの発達段階に応じて、身に付けさせたい力を明確にし、運動の特性（動きのおもしろさ）にふれ、楽しさを味わう単元構成や学習過程の工夫を行うなど、指導法や評価を工夫・改善することで、「わかる喜び」「できる喜び」を感じられるであろう。

2 研究の視点

- ◇ ねらいの明確化と学習過程の工夫
 - ・ねらいを明確にした指導（単元を通して育てたい児童像（ゴールイメージ）の明確化）
 - ・「習得・活用・探究」型の授業の追究
- ◇ 指導法の工夫と改善
 - ・運動の特性（動きのおもしろさ）にふれ、楽しさを味わう場の設定や教具の工夫
 - ・人、もの、こと、との豊かなかかわりを工夫した学習展開
 - ・「習得・活用・探究」型の授業の追究
 - ・「わかる喜び」「できる喜び」を味わうことができる支援の在り方（「資料提示」「示範」「助言・補助」「賞賛」「環境づくり」「発問の工夫」など）
 - ・ねらいを達成するための体育的言語活動の充実
 - ・「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を位置づけた指導法の工夫
 - ・ICTの効果的な活用
- ◇ 学習評価の工夫
 - ・体育ノート・学習カード等の効果的な活用
 - ・アンケートや振り返りを活用した授業評価と授業改善

3 本年度の主な活動内容

- 4月19日 総会（役員改選、本年度の研究計画について等）
- 6月 7日 一斉研（理論研修会）
- 8月 2日 夏季一斉研
 - ・講義「新学習指導要領に基づくこれからの体育学習」
県教委 体育保健課 指導主事 生田優介氏
 - ・グループ別指導案検討会
- 10月11日 一斉研（授業研究会）
 - ・5年「八橋パワーアップ道場」（体づくり運動） 授業者 坂西理之（八橋小）
 - ・5年「ハンドボール」（ボール運動） 授業者 山田宏彰（浦安小）
 - ・5年「けがの防止」（保健） 授業者 川口純平（成徳小）
 - ・3年「黒ぼく・ダンスカーニバル」（リズムダンス）
授業者 横山寛之（大栄小）
- 10月27日 第55回中四国小学校体育研究発表大会 香川大会
- 2月 7日 一斉研
 - ・本年度の取り組みのまとめ、30年度の研究の方向について

- ◇ その他 研究成果刊行

『かかわり合い、主体的に課題解決に向けて取り組む保健学習』

倉吉市立成徳小学校 川口 純平

1 テーマ設定の理由

保健学習の内容の取り扱いについて、学習指導要領において「保健の指導に当たっては、知識を活用する学習活動を取り入れるなどの指導方法の工夫を行うこと。」とされている。また、本研究の視点のひとつでもある「習得・活用・探究型の単元構成の工夫」にもあるように、習得した知識を活用する学習活動を工夫することで学んだことを実生活に生かしていけるのではないかと考える。授業場面では身近な生活における具体例を提示することで、主体的に課題と向き合い、グループによる話し合い活動の中で多様な考えを聞き合うことにより思考力や判断力も向上し、実生活で適切な行動選択や意思決定を行うことに繋がっていくのではないかと考える。

2 研究の視点

（１）保健学習における「習得・活用・探究」型の単元構成の工夫

本単元「けがの防止」は、けがや交通事故の原因を明らかにしたり、防止したりする手立てを理解させるとともに、けがの種類や程度などの状況に応じた手当が自分で行えるようにすることをねらいとしている。「習得・活用・探究」という学びの単元構成で指導していくことで、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「知識・理解」をバランスよく育み、学習の中で課題を見つけ、解決しながら自分たちの生活を見直していく力を育てることができると考える。

（２）児童の課題解決につながる実験・実習などを取り入れた指導法の工夫改善

これまで、保健の授業は講義形式の一斉指導になりがちで、児童が受け身で授業に参加していることが多かった。講義形式から参加型の学習で指導していくことで、児童の興味・関心や意欲を高め、グループで協力しながら主体的に課題を解決していく力を育てることができると考える。

（３）ワークシートなどを用いた次の学習につながる評価と指導の工夫

本単元では、毎時間の振り返りが見られるようにワークシートを作成し、単元を通して自己評価ができるようにした。単元を通して授業ごとの記述を見ることができるワークシートを用いることで、習得した知識と関連づけながら自分の学びを振り返る力を育てることができると考える。また、次時の学習の見通しを持つことにも役立つと考える。



3 研究の実際

(1) 保健学習における「習得・活用・探究」型の単元構成の工夫

〈単元の流れと評価計画〉

		1	2 (本時)	3	4
主なねらい		事故やけがは人の行動と周りの環境が原因で起こることを理解する。	交通事故を防ぐためには危険を回避する人の行動と安全な環境の整備が必要であることを理解する。	けがを防ぐ方法や犯罪から身を守る方法を理解する。	実習を通じて、簡単なけがの手当てができるようになる。
学習活動		・自分自身の経験や資料などから、小学生の事故の現状について知る。 ・事故やけがの原因について事例を通して考える。	・危険予測トレーニングを行い、事故につながる原因を考える。 ・生活場面から隠れた危険を探し、問題点と危険を避ける方法を考える。	・学校や地域で行われている安全のための工夫や努力について考える。 ・犯罪が起きやすい場所や場面の資料をもとに犯罪から身を守るための方法を考える。	・けが人が出たときの対処のしかたについて考え、自分でできる簡単なけがの手当てのしかたを練習する。
評価の計画	関	①		①	①
	思		①	②	
	知	①			②

単元の評価規準	関心・意欲・態度	思考・判断	知識・理解
	けがの原因やその防止、手当について、進んで課題を見つけようとしたり、意欲的に課題解決に取り組んだりしようとしている。	身近な生活におけるけがや事故の原因やその防止、手当について解決の方法を考えたり、判断したりしている。	身近な生活におけるけがの原因やその防止、手当について理解している。
学習活動に即した評価規準	①けがの防止について、教科書や資料を見たり、自分の生活を振り返ったりして、進んで学習に取り組もうとしている。	①事故の防止について、生活場面から隠れた危険を探し、問題点と危険を避ける方法を考えている。 ②学校や地域で行われている安全のための工夫や努力について考えている。	①事故やけがの原因について、理解したことを発表したり書いたりしている。 ②学習内容を踏まえて簡単なけがの手当てをしている。

本単元は全4時の単元構成とし、第1～3時は身近な生活場面の具体例を通した話し合い活動を中心に、第4時は養護教諭と連携を図りながら演習を行った。

（２）児童の課題解決につながる実験・実習などを取り入れた指導法の工夫改善

○資料提示の工夫

児童が関心をもって学習に取り組んだり効率よく学習内容を理解したりできるよう効果的に ICT を取り入れ、導入では、「HONDA 危険予測トレーニング」を使いながら学習活動を行った。また、課題提示の際には、子どもたちにとって身近である小学校内の写真や通学路の写真を用いて行った。

○グループでの話し合い活動

グループ学習では、提示された課題についてグループ全員の意見を聞いた上で、全体場で発表できるようにグループの意見をまとめさせ、子どもたちが多様な考えを聞き合いながら考えを広めたり深めたりできるよう学習を展開していった。全体発表では、ロールプレイ形式とポスターセッション形式の２パターンを扱った。

（３）ワークシートなどを用いた次の学習につながる評価と指導の工夫

毎時間の振り返りが見られるようにワークシートを活用し、前時の振り返りと本字で学んだことを関連づけながら記入させた。また、毎時間学習後に振り返りのワークシートを回収し、児童の学びを評価規準の観点と照らし合わせながら評価するとともに支援の必要な児童の確認も行った。

４ 成果と課題

【成果】

- 子ども同士の学び合いの力を高めるためにグループ学習を積極的に取り入れることにより、教師と児童のやりとりだけではなく、グループ内で様々な考えを聞き合いながら考えを広めたり深めたりしながら学習を展開することができた。友だちの発言からトラックの後ろに潜む危険に気づいた児童もあり、これからの生活で危険予測をしていきたいと振り返ることができていた。
- 学習課題をポスターセッション形式でまとめたことにより他のグループの気づきを視覚的に学ぶことができた。また、授業後に掲示することもでき、学びの足跡としても活用することができた。掲示後に自分のグループだけでなく他のグループのポスターを見返す児童が多くあった。
- 導入で「HONDA 危険予測トレーニング」を活用したことで、より具体的な場面を見ながら意欲的に危険予測を行うことができた。資料の扱い方によって児童の学習への意欲や取り組み方の向上に繋がると感じた。

【課題】

- 多くの児童が目に見える危険については考えていたが、隠れた危険を予測して考えていた児童はわずかだったので、大切なポイントは学習中にしっかり抑えていく必要があった。
- グループでの話し合いをどのようにまとめるかを事前に示していなかったため、話し合った後に戸惑うグループがあったため、ポスターセッション形式でまとめさせる際には完成イメージを提示した方が良かった。
- 各グループの発表を聞いた後教師の言葉でまとめるのではなく、気づいたことを児童に発言させ児童の言葉でまとめていくようにするとさらに深い学びになっていくと感じた。



表現運動グループ

『ゴールフリー！心も体も解き放ち、はずんで踊るリズムダンス』

北栄町立大栄小学校 横山 寛之

1 テーマ設定の理由

表現運動は、心と体を解き放って、リズムに合わせたり、想像を膨らませて自分のイメージを体で表現したりすることが楽しい運動である。本実践では、楽しさや喜びを味わうために身につけさせたい動きを明確にした指導を行うことで、意欲的に取り組むリズムダンスの学習にしたいと考え、テーマを設定した。学習過程においては、お互いのよさを認め合い教え合ったりする活動を通してリズムダンスの楽しさを味わい、心も体ものりのりで踊ることのできる児童を育てることができると考えた。

2 研究の視点

(1) 指導内容の明確化と体系化

リズムダンスの学習は、「ロック」や「サンバ」などの特徴的なリズムの乗り方を掴むことが重要である。その上で、身につけさせたい動きを明確にした指導や、「やってみる（習得）」「ひろげる（活用）」「ふかめる（探究）」と発展させる単元構成や学習過程の工夫を行うことで、リズムダンスの楽しさや喜びを味わうことができると考える。

(2) 指導法の工夫と改善

仲間とかかわり合いながら即興的に踊る体験と、個の違いへの対応を重視した学習展開を行うことで、共感的なコミュニケーションが育ち、動きを磨き合ったりより楽しく踊ったりできると考える。

(3) 学習評価の工夫

ゴールフリーな表現活動をより高めるためのプロセスの評価（自己評価・相互評価）を即時的・継続的に行い、児童に学習内容をフィードバックすることで、表現活動のモチベーションが高まると考える。

3 研究の実際

「黒ぼくダンスカーニバル！」の実践を通して（3年生リズムダンス）

(1) 指導内容の明確化と体系化

①指導内容の明確化（運動の特性と単元目標）

- リズムダンスは、現代的なリズムに乗って、リズムのとり方や動きを工夫したり、友だちと自由にかかわり合い、感じ合って踊ったりするのが楽しい運動である。
- 自己の心身を解き放って、リズムやイメージの世界に没入してなりきって踊るのが楽しい運動である。
- 友だちの動きを見て、お互いのよさを認め合ったり、活かし合ったりすることを通して、共感的なコミュニケーションの力がつく運動である。
- 心と体をほぐしたり、全身を使って動いたりすることで、自己表現ができる運動である。

これらの運動の特性を踏まえ、リズムダンスの単元目標を、以下のように設定した。

- | | |
|--------------|--|
| 【 技 能 】 | リズムに乗り、全身で弾んで踊ることができるようにする。 |
| 【 思考・判断 】 | お互いの動きを認め合い助け合って練習や発表したり、友だちのよい動きを自分の踊りに取り入れたりすることができるようにする。 |
| 【 関心・意欲・態度 】 | リズムダンスに進んで取り組み、場の安全に気を配ることができるようにする。 |

指導にあたっては、後述する児童の実態から、リズムダンスについての理解や経験が不足していることを考慮し、恥ずかしがらずに体を動かすこと、音楽に合わせて楽しく体を動かすことを重視して学習をスタートさせた。リズムの特徴を掴み、リズムに乗って自由に楽しんで踊ることに重点を置いて指導を行った。

②学習過程の工夫（単元の流れ・全6時間）

1	2	3	4	5	6
・リズムのくずしを体験しよう	・体の各部分でリズムをとりながら、友だちと一緒に即興的に全身で踊ることの楽しさを味わおう。		・リズムに乗って全身で楽しんで踊ったり、友だちと自由に関わり合いったり、扇子を合ったり対応させたりして楽しく踊る。		・自分のダンスを発表しよう
様となる 学習内容	学習の始め	ロック	サンバ		学習の最後
		・みんなでやってみよう。	・リズムに乗り全身で踊ろう。 ・グループで踊ろう。		

単元の始めに体幹部（おへそ）でリズムに乗り全身で即興的に踊る楽しさを味わう活動を仕組み、「体のくずし」「リズムのくずし」「空間のくずし」「人間関係のくずし」という観点でアドバイスをを行った。また、ロックとサンバのリズムの特徴の違いやそれぞれのリズムへの乗り方を掴むために先生と踊る場を設定し、その動きを活用しながら友だちと自由に楽しんで踊る活動を十分に行った。そして、単元の終末では、学習の成果を発表する機会を設け、児童一人ひとりに達成感を味わわせたいと考えた。

（2）指導法の工夫と改善

①個の違いへの対応を重視した学習展開

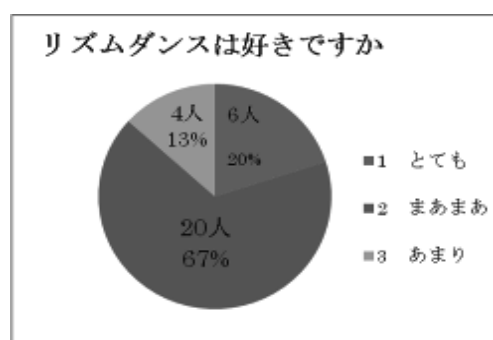
○児童の実態

本学級の児童30名（男子12名、女子18名）は、事前に行ったアンケートに対して、30人中22人が体育の学習を「とても好き」だと回答し、その理由の多くが「体を動かすことが好き」であった。一方でリズムダンスを「とても好き」だと回答した児童は30人中6人で、「まあまあ好き」「あまり好きではない」と答えた理由として「リズムの乗り方が分からない」と答えている。これらのことから、全体的に運動に関する興味・関心は高いが、リズムダンスの学習に対してはマイナスのイメージ（恥ずかしがらずに全身を動かすこと）を持っている児童もいることが分かった。

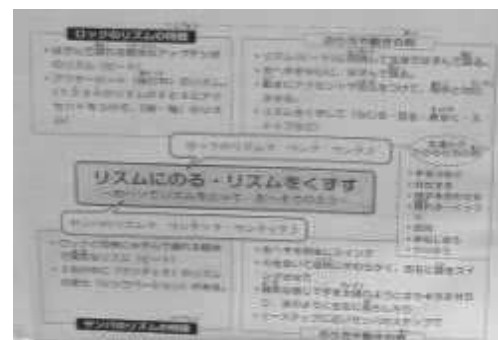
そこで、リズムに乗って自由に踊ることのできた動きを取り上げたり、リズムの特徴を生かした乗り方と動きのおもしろさをまとめたものを掲示したり助言したりすることで、特徴を捉えて踊ることができるようにした。また、リズムに合った繋ぎの動きを示しておくことで、即興的な踊りが思いつかず困った時に活用し、リズムに乗り続けることができるようにした。

②仲間とかかわり合いながら即興的に踊る体験

色々な人とダンスを踊る場を設定することで、友だちとかかわり合い模倣しながらダンスが楽しむことができるように工夫した。学習の後半部では、見せ合いの場を設定し、それぞれのよさを認め合ったり教え合ったりしながら、さらに動きを工夫したり変化を加えたりしながら自由に楽しく踊ることができるようにした。



＜事前アンケート＞



＜リズムの乗り方＞



＜動きの宝箱＞

（3）学習評価の工夫

①ゴールフリーな表現活動をより高めるためのプロセスの評価

毎時間の終わりに「リズムの乗り方」と「楽しさ」の観点で自己評価をし、学習意欲の喚起や児童が課題意識をもてるようにした。振り返りの欄を活用し、その時間によい動きをしていた友だちについて記入するようにした。評価に役立つだけでなく、児童一人ひとりの能力の向上をねらいとした。さらに、各チ

ームで使用するダンスボードを用意し、その時間のテーマやよい動きをした仲間やチームとしての振り返りを行うようにし、個と集団の評価を行えるようにした。



<学習カード>



<チームボード>

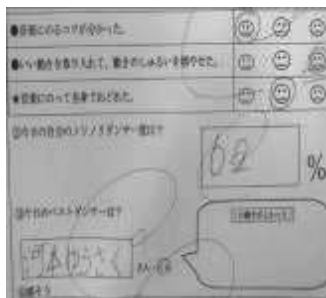


<振り返りの様子>

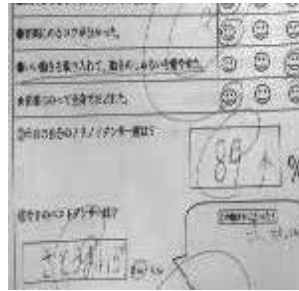
3 成果と課題

【成果】

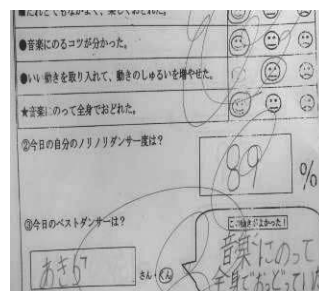
○単元の開始直後、ダンススペースの端で固まり自信の無さそうだった児童も、単元の後半ではダンススペースの中央で動きを工夫したり変化を加えたりしながら自由に楽しく踊ることができるようになった。児童がリズムの乗り方や動きを言語化することで、意欲的に活用し自分たちで動きを表現することができたためである。また、学習カードの振り返りがより具体的になっていったことから、リズムの乗り方のこつが分かり、友だちのよい動きやリズムの乗り方を進んで取り入れることができるようになったと考えられる。



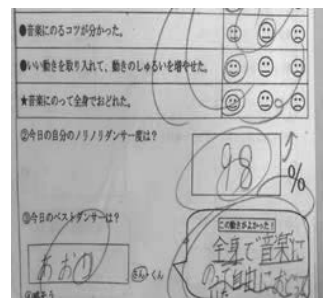
10月6日



10月10日

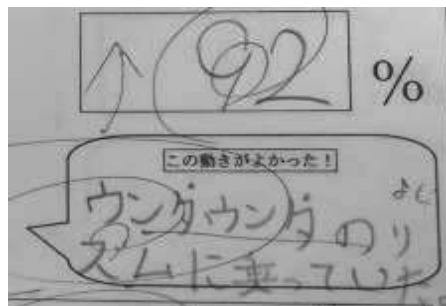


10月16日



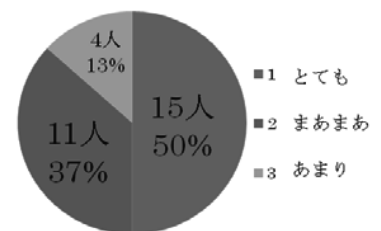
10月23日

○自己評価・相互評価を通し、動きを広げよりリズムに乗って乗り全身で楽しく踊ることのできる児童が増えた。事後アンケートでは、リズムダンスを「とても好き」と回答した児童は30人中15人となり、リズムダンスの学習に対して抱いていたマイナスのイメージ（恥ずかしがらずに全身を動かすこと）の改善を図ることができた。



<学習カード>

リズムダンスは好きですか



<事後アンケート>

【課題】

- 一単位時間の学習の見せ合いの場面で、ダンスバトルを取り入れた。意欲的に楽しんで踊ることができたが、かけ合いの部分については課題が残った。今後の表現運動で経験を積ませたい。
- 子どもたちの動きを止めないことや指導者の説明を少なくし、児童が自由に踊る時間の確保をするなかで友だちと即興的に踊る経験を積ませたい。
- ダンスバトルの攻守の切り替えに太鼓等を使うことで、場の変化を持たせることができると分かった。音楽だけでなく、教具の選定も工夫していきたい。